

## 自主シンポジウム 26

# 学級における教師-生徒関係を 質的にどう記述するか

企画 蘭千壽（防衛大学校）・浅田匡（神戸大学）・秋田喜代美（東京大学）  
 司会 中沢潤（千葉大学）  
 話題提供者 市川洋子（お茶の水女子大学）・高橋知己（盛岡市立羽場小学校）・  
                   伊藤美奈子（お茶の水女子大学）  
 指定討論者 藤沢伸介（跡見学園女子大学）・蘭千壽（防衛大学校）

## 企画主旨

特定の学級に入り、長期にわたって研究をしていく場合には、研究者も実践者もそこに、生きた個々の子どもの姿や学級の歴史を知っていく関係ができる。そしてその関係を何らかの指標によって数量的に記述するのみではなく、言語によって記述する時にどのような記述があり得るのかを検討するのが本シンポジウムのねらいである。質的な研究はさまざまな研究領域で行われているが、個々の研究対象領域によってその対象へのアプローチに伴う困難は異なるものがある。本シンポジウムでは、学級における教師-生徒関係を、教授-学習、学級経営、学校臨床のそれぞれの視点から捉えていく際、質的に記述するために、どのような手法がありえるのか、「フィールドへの参加、データの収集、記録、分析、記述」のプロセスをどのように考えるのか、そこでの研究における信頼性や妥当性をどのように考えるのかを、話題提供者が各自がおこなった質的研究や実践を紹介し、その問題提起を核にして検討したいと考える。

## 「観察者の変容と質的記述との関連」

市川洋子（お茶の水女子大学大学院）

授業における教師生徒のやりとりを記述するさいに量的に捉えられるものと質的にしか捉えなくいものとがある。例えばある学級の発話傾向は量的記述を用いたほうが分かりやすい。しかし量的記述では同じものとしてカウントされてしまう言動でも、その学級の歴史や文化、発言者の学級内関係性、その発言後に生じた出来事等によってその言動の意味や授業に与える影響は全く異なってしまう。そのため、授業におけるやりとりの意味や授業に与える影響を明らかにする場合、その場を構成している様々な要因、文脈を丁寧に記述す

るには質的記述が適しているだろう。

質的にどう記述するか、つまりどの要因を取り上げて関連づけるのか、どのようなモデルを構成するのかは、「フィールドへの参加、データの収集、記録、分析、記述」のプロセスとそれに伴う観察者（研究者）の変容とが大きく関わってくるのではないだろうか。

そのプロセスは一方向的なものではなく、双方向的でなおかつお互いに影響を与え合うものであると考えられる。例えば、フィールドへの参加は、フィールドへの入り方（依頼または外部からの強制）、生徒に対する観察者の紹介の仕方、フィールドにおける観察者の居方（積極的参加・観察のみ）によって大きく変わってくる。そして、観察者の授業参加の仕方はデータの収集に大きく影響すると同時に観察者と教師や個々の生徒との関係形成にも影響を与えている。またデータを収集していく中で教師や生徒の姿を知ることによって観察者の参加の仕方（特に居方）も変わり、データ収集や記録の質も変化するだろう。その結果として質的な記述も変化していくと考えられる。

このように観察者の変容に伴って、授業における教師生徒関係の質的記述も変容していくと考えられる。従って教師生徒関係の質的記述を行なう場合、観察者自身のその学級での位置、教師や生徒との関係性を記述することも質的記述の信頼性や妥当性を高める一つの方法ではないだろうか。また授業は観察者にとっても生徒として（あるいは教師として）何年も過ごした場であり、暗黙の授業観などを持って事例を解釈してしまうこともある。したがって、そのようなことも敏感に感じ取り認識することが重要であろう。

本報告では中学校の国語の授業を事例に取り上げて、教師生徒のやりとりを量的質的に記述した研究をまじえながら、上記の意見について考察し

ていきたいと考えている。

### 「教師の視点、生徒の視点」

高橋知己（盛岡市立羽場小学校）

学級経験の記述は、研究者にとっても実践者にとっても大きな意味を持っていることは今更言うまでもない。例えば、いかに有効な量的調査が開発されようとも、日常の中で生起する教師一生徒関係について（いわゆる）質的に記述する嘗為は否定されることはないであろう。

教室における「教育」には、その瞬間その場で生起したことに反応することで形成されるものとはかぎらないことがある。後になって考えてみたときに感じる、いわば「遅れて」くる教育もあるのではないかだろうか。もちろん教師も生徒も、ある出来事が起こる時機をとらえて反応しており、その瞬間に伝達されること感受することもあるのだが、むしろある一定の時間の経過と共にそのときの状況を経験し直してみたときに、その場における本質的な意味が見えてくることもある。つまり、「もう一度」その状況を経験し直してみると、見えてくるものがあるのだ。

ところで、こうした「もう一度」体験した状況においては、教師、生徒の双方からの視点により、教室内の状況が再構成され、意味が付与される。もちろんそれには色々な要素によって差異が含まれることになる。ここで重要なのは、「差異をうめて共通の意味をもとう」とか「一体になろう」ということでは決してない。その差異が「なぜ生じ」、「どんな意味をもつのか」、そして差異があるからこそ「どう生きればいいのか」ということを検討することにあるように思われる。

教師・生徒の双方からの教室「物語」を読むことの意味は大きい。そこで、学級という状況に置ける教師・生徒双方の立場からの記述をシステム論的に検討してみようと考える。そこには、例えば、教師とある生徒とのやりとりを観察者として、行為者として記述する生徒や、学級を自らの策定するルールの中で動かそうとした自分自身を見つめている教師が見えてくる。こうした差異のある両者の記述を（質的に）分析することで、これまでとは違った視点から学級を眺めてみることが可能になるのではないだろうか。

### 「学校臨床場面における点の関わり・線の関わり・面の関わり」 伊藤美奈子（お茶の水女子大学）

学校現場での臨床活動は、個人臨床の知見を学校という場に適用するという視点から始まり、その後、学校コミュニティ全体に関わる新たな視点や理論の構築へと歩を進めてきた。

臨床的な研究（に限らず、実践的志向を持つ研究）では、対象を丁寧に観察し、それを綿密に記述するところから出発する。学校臨床（スクールカウンセラー：SC）の現場では、関与の対象（クライエント）は多岐にわたる。SCの居場所が十分に確立される前の段階では、SCが対象とするのは子ども個人、教師個人であることが多い（点への関わり）。しかし、徐々に人間関係の綾が見えてくると教師と生徒との関係を修復することが必要となってくる。さらに、子どもと子ども、子どもと保護者、教師と教師といった「関係」に介入する事態にも遭遇する（線への関わり）。さらに、SCが学校組織の中に位置づいてくると学級全体、学校全体を揺るがすことことで組織の構造そのものを変える必要も出てくる。あるいは学校内で解決できないような事態に対しては、学外の専門機関との連携に努め、学校コミュニティ・ネットワークそのものを変革することもある（面への関わり）。これら点への関わり ⇄ 線への関わり ⇄ 面への関わりが互いに重層的に織り成されながら進んでいくのが、学校臨床活動の醍醐味でもある。

SC（あるいは実践研究者）には、外の視点で現場を査定する一方、現場内で実践プロセスを共有しともに経験するというように、同時並行的な複数の視点が求められる。現場で起こるさまざまな局面を客観的・立体的に観察・記述するには、内と外の狭間という曖昧な立場に身をおくことが意味を持つ。この曖昧さに耐える力を磨くことも、SC（そして現場研究者）には必要となるだろう。

事例研究あるいは実践報告の信頼性・妥当性の問題は、これまでにも多くの議論がなされてきた。臨床・実践研究においては統制群を設定することもできないし、科学的普遍性や一般法則を見出すことも難しい。現場で起こっている問題（具象）と、それに対する関わりがどのように相互作用し意味の連鎖としての物語が記述できるかにその真価があるのであり、その信頼性・妥当性は実践の中でこそ有機的意味を持ってくるものと考える。